



ともに挑む。つぎを創る。

生命工学領域 研究職員採用説明会

📍オンライン (Teamsウェビナー)



2026.8.4 **火** **15:00**
—16:30

NATIONAL INSTITUTE OF
ADVANCED
INDUSTRIAL
SCIENCE &
TECHNOLOGY

「Q&A」

@生命工学領域職員採用説明会

NATIONAL INSTITUTE OF
ADVANCED
INDUSTRIAL
SCIENCE &
TECHNOLOGY

リクルートイベントについて：

- Q. インターンシップはありますか？
- Q. OBOG訪問は可能ですか？
- Q. 今後のリクルートイベントを教えてください。

回答：

インターンシップ、OBOG訪問の制度はありませんが、以下の日程で研究室見学のイベントを行います。ぜひご参加ください。

- ・ 2026年9月25日(金) 研究室合同見学会（参加受付中）
- ・ 2027年2月～3月 研究室公開week（2026年12月参加受付開始予定）

産総研の公式SNSをフォローして、見逃さないようにしましょう！

どなたでも参加可能。グループで3つ程度の研究室を見学します

28年3月に博士課程修了見込み、ポスドク、企業の方が対象。希望の研究室を1人ずつ見学します。

また、健康医工学研究部門はホームページから随時見学を受け付けています。

採用について：

Q. 2026年度の秋採用の募集日程や募集人数について教えてください。

回答：

2026年度の秋採用(博士卒第2回公募)は2026年9月中旬募集開始の予定です。募集人数は若干名であり、公開しません。

産総研の公式SNSをフォローして、
見逃さないようにしましょう！

採用について：

- Q. 倍率を教えてください。**
- Q. 修士卒と博士卒の採用割合を教えてください。**
- Q. 修士卒採用を増やす予定はありますか？**

回答：

募集年度により採用数が変動します。領域が実施したい研究を推進できる研究者をできるだけ多く採用したいと考えています。

採用者の割合については博士卒が8割、修士卒が2割くらいの比率です。

現段階では修士卒採用を増やす予定はありません。ただし、今後の社会情勢や所の研究戦略に照らし合わせて採用計画を修正することがあります。

採用について：

Q. 配属先(拠点)の決め方を教えてください。

Q. 研究テーマの決め方を教えてください。

回答：

修士卒、博士卒共通：領域やユニットの戦略と個人のスキルやバックグラウンド等を考慮した上で、採用審査プロセスの段階で配属先の研究ユニットやグループの候補が提示されます。

博士卒のみ：応募の際に各ユニットからの公募テーマを選択して応募していただくことになりますが、上記のように採用審査プロセスにおいて、希望を伺いながら配属するグループ・チーム・拠点を調整していきます。

研究テーマは、所属する研究グループ（チーム）のグループ長（チーム長）と話し合い、個人のスキルとグループのミッションに合ったテーマを決めていきます。

採用について：

Q. 求める人物像を教えてください。

Q. 活躍する人の特徴を教えてください。

回答：

高い研究力を有し、研究課題に柔軟に対応する適応力、周囲と協働するコミュニケーション能力、成果を社会実装につなげる視点をもつ人材を求めています。選考では、組織とのマッチング、本人の業績や能力、欠員状況なども加味します。

産総研の採用サイトには、生命工学領域の研究者を含め、多くの仕事内容紹介、インタビュー、組織風土、キャリアに関する記事が掲載されています。ぜひご覧ください。

<https://www.aist.go.jp/sc/recruit/>

採用について：

Q. 修士卒と博士卒の求める人材の違いは？

Q. 修士卒と博士卒の選考基準の違いは？

回答：

博士卒者は即戦力といった期待もあるのに対して、修士卒者には産総研業務を通じて経験を積んでいただいて、将来的に高度な研究人材となっていただくことを期待しております。

修士卒者は、現時点の研究業績だけでなく、パーソナリティや今後の成長可能性、将来性を重視します。一方、博士卒者には、論文等の研究業績と、確立された技術の独創性や専門性がより求められます。学位による優先順位があるのではなく、評価基準が異なります。

採用について：

Q. 人柄はどれくらい、選考で重視されますか？

回答：

とても重視されます。研究課題に柔軟に対応する適応力や、チーム・共同研究先と協働するためのコミュニケーション能力を重視しており、専門性や業績とあわせて総合的に評価します。

採用について：

Q. 総合職や他領域との併願は可能か？

回答：

総合職との併願：可能です。

他領域との併願：可能です。ただし、応募の過程でどの領域で優先して選考を進めるか、志望順位を決めて頂く必要があります。

採用について：

- Q. 学生時代(現在)の研究内容はどれくらい採用に影響するか。**
- Q. 原著論文や学会発表などの研究実績は採用の際に考慮されるか。**
- Q. 現在の研究内容と公募の研究分野が異なる場合はどのように評価されるのか。**

回答：

研究内容は選考上の要素の一つですが、それだけで決まるものではありません。希望分野との適合性、本人のスキル・バックグラウンド、研究の質や今後の展開可能性、受入グループとの相乗効果などを総合的に評価します。修士卒の場合、現在の研究テーマと配属先の研究内容が直結していることは必須ではありません。

現在の研究内容と公募の研究分野が異なっても、高い専門性を有しており、公募している研究テーマに柔軟に対応可能な能力、高いモチベーションがあれば問題ありません。

採用について：

Q. 50代でも応募可能か？

回答：

可能です。年齢制限はありません。

ただし、即戦力として、組織のリーダー的人材として、短期間にどれだけ業績を上げて頂けるか、組織全体のパフォーマンス向上に寄与してもらえるか、という観点から審査されます。

採用について：

Q. 博士課程が早期修了となった場合、入社時期を早められますか？

回答：

例えば春公募で内定となり、9月末で博士課程の早期修了となる場合は10月からの入所も可能です。審査の過程で何時学位が取得できる見込みか確認させて頂き、入所時期を相談させてもらうこともあります。

採用について：

Q. 博士課程を中途退学し、修士卒研究職に応募することはできますか。

回答：

修士卒として応募することは可能です。早期に社会実装を目指した研究に従事したい場合などは検討して下さい。ただし、入所後の業務において、早期の入所が特に有利・不利に働くわけではありません。すでに博士課程の途中まで進んでいるのであれば、博士課程を修了して博士号を取得した上で、博士卒として入所しても十分活躍できます。修士卒で入所した場合、改めて博士号取得を目指すことになるため、二度手間になる可能性があります。

採用について：

Q. 企業で開発職としてやっていた人が、研究職として採用されたことはありますか。

回答：

複数名在籍しており、活躍されております。

採用について：

Q. 任期付か、パーマネントかというのはどのように決まるか？

回答：

基本的にどの職種に応募頂くかで決まります。また、研究テーマやこれまでのキャリアに応じて選考の段階でこちらから提案させて頂く場合もあります。ただし、生命工学領域ではほぼ100%の方がパーマネント型での採用となっています。

採用について：

Q. 応募条件に加え、現在特に注力されている領域はありますか？

回答：

特に注力しており、確保したい人材を募集要項に記載しております。

修士卒採用について：

- Q. 博士号取得は必須ですか？
- Q. 大学院進学先はどのように決まりますか？
- Q. どのタイミングで大学院に進学しますか？

回答：

修士で入所された方には、原則として入所後に博士号を取得することを推奨しています。進学先は上司(育成責任者)と相談して決めます。出身大学(研究室)の博士課程に進学するとは限りません。

入所後1~2年後に進学するのが一般的です。

研究テーマについて(入所後)：

- Q. 研究者1人あたりどれぐらいのテーマを担当しますか？
- Q. 入所後の研究テーマはどれぐらいの頻度で変わりますか？
- Q. それはどのように決まりますか？

回答：

研究者一人が担当するテーマ数は、配属先やプロジェクト、個人の状況によって異なり、一概には言えません。大まかに自分が行いたい研究と組織から命令されて行う研究に分けられます。自分が行いたい研究は（上司と相談しつつ）自分で決めることが多いです。組織から命令される研究は定期的に変わる可能性があります。またそのエフォートの比率も状況により変化します。（10：0から0：10まで変わる可能性があります）

研究テーマについて(入所後)：

Q. 修士卒と博士卒で業務内容は異なりますか？

回答：

修士卒と博士卒で、基本的な業務内容に違いはありません。いずれも研究職として採用され、研究業務に従事します。主な違いは、修士卒として早い時期に入所するか、博士号取得後に入所するかという点と、経験に応じた業務量が若干異なる点です。

研究テーマについて(入所後)：

Q. バイオトライボロジーという機械工学を基盤に生体・化学に関わる分野で研究を行っているのですが、近い分野の研究はありますか？

回答：

健康医工学研究部門には、医療機器や生体材料の研究に取り組んでいるグループがあります。まずは、健康医工学研究部門に問い合わせてください。

<https://unit.aist.go.jp/hmri/>

<https://unit.aist.go.jp/hmri/humanres/tour.html>

研究テーマについて(入所後)：

Q. バイオマス材料/セルロースに関する研究を行っています。応募できる分野はありますか？

回答：

具体的な研究内容(対象)によりますが、バイオものづくり研究センターとの親和性が高いと思われます。

研究テーマについて(入所後)：

Q. 他分野（分析化学・食品科学）を専門としていますが、生命工学領域の公募への応募を検討しています。専門分野が完全に一致していなくても応募対象となるでしょうか。どの程度の分野的な近さが求められるのか教えていただきたいです。さらに、採用後に専門分野を広げながら研究を進めることは期待されていますか。

回答：

ご質問の方が具体的にどのような研究に取り組んでいるのか分かりませんが、生命工学領域には、分析化学や食品化学を専門とする研究者が在籍しています。複数の部門に両分野に関連する研究に取り組んでいる研究者がおります。専門分野が完全に一致していなくても応募は可能です。まずは希望する研究部門に問い合わせ、ご自身の専門性やスキルをどのように生かせるか、また、部門の研究との相乗効果をどのように生み出せるかについて相談することをお勧めします。専門分野を広げながら研究を発展させていくことも期待されます。

大学との違いについて：

Q. 産総研と大学で、研究テーマ設定方法や進め方に違いはありますか？

Q. 必要なスキルやに違いはありますか？

回答：

産総研では、社会実装を意識したテーマ設定と進め方になります。大学で求められる、公的資金獲得、論文執筆能力に加えて、特許戦略、企業とのやりとりにも精通する必要があります（入所後に鍛えます）。

大学との違いについて：

Q. 研究が好きな人はこの職に向いていますか？

回答：

産総研と大学の大きな違いの一つに、テーマ設定があります。大学では、学術への貢献が重視されますが、産総研では、社会実装であったり、社会課題解決に資する研究が求められます。好きな研究をどうやって社会課題解決に活かすかを考えられる人が、産総研に向いていると思います。

キャリアについて：

Q. ロールモデルを教えてください。

回答：

採用時の状況等によって大きく変わってくるため、一概には言えませんが、入所後数年～数十年は研究業務に従事して頂きます（研究員→主任研究員）その後、上級主任研究員→首席研究員として研究を極めるキャリアや、グループリーダーなどの管理職となるキャリア、知財や標準化のスペシャルとなるキャリアが想定されます。

キャリアについて：

Q. 働くうえでの修士卒、博士卒それぞれのメリットやデメリットがあれば教えてください。

Q. 修士卒、博士卒にキャリアの違いはありますか？

回答：

修士卒と博士卒には一律の優劣やキャリアパスに差があるのではなく、期待される段階が異なります。修士卒者は現時点の業績より成長可能性や将来性を重視し、配属後の育成体制の中で専門性を高めます。博士卒者は、確立された専門性や研究業績を基に、より主体的なテーマ立案が期待されます。

異動について：

Q. 拠点間の異動はありますか？

回答：

異動には期間が決まっているものと決まっていないものがあります。研究戦略の観点から、期間が決まっていない拠点間異動をお願いすることもあります。また、個人の研究テーマの変化や希望を踏まえて拠点間異動をする人もいます。

期間が決まっているものとしては、所内の事務部門で1～2年間勤務し、研鑽を積んでいただくことがあります（基本的に入所者全員が対象です）。また、外部機関で経験を積む「出向」もあります。

異動について：

Q. 出向について詳しく教えてください。

回答：

個人の研究状況等も考慮しますが、生命工学領域では基本的に入所5年後をめぐりに産総研内の本部組織や研究管理関連部署への内部異動、あるいは所外（経産省等）への出向を1年間経験してマネジメント能力を養う機会があります。出向後は原則元の研究グループに帰任しますが、本人の希望や研究状況に応じて他の研究グループに配属されることもあります。

異動について：

Q. 産総研の創業支援制度について教えてください。

Q. GTIEとの関係について教えてください。

回答：

産総研はGTIEに参画していませんが、創業支援などの類似制度はあります。また、GTIEなどの外部の社会実装・創業支援プログラムに応募することも可能です。現在GTIEなどで採択されている研究課題を継続できる可能性もあります。ただし、外部プログラムへの応募や採択課題の継続に当たっては、配属先の上長と十分に相談する必要があります。